

杉村廣太郎宛夏目金之助書簡明治四三年一月一日

杉村楚人冠宛夏目金之助「漱石」書簡  
大正元年「推定」一二月二四日

拝啓 本日中村翁  
氏よりの手紙にて大兄  
の愛児御死去の旨を  
を承知致し候 永々  
御丹精の甲斐もなく  
定めて御力落しの事  
と存候 先達御面  
会の節六づかしき由は  
伺ひたれど多分は癒  
るだらう位に存じ居候  
ひとに愈駄目と聞いて  
今更御氣の毒の  
態を深く致し不取  
敢右御弔詞迄

敬具

一月十九日

夏目金之助

杉村廣太郎様

(訳)

今日(明治四三年一月十九日)、中村翁(古  
峡)からの手紙で楚人冠の御息女が亡くな  
った旨を聞きました。

さぞ、お気を落としていらしやることでは  
よう。

先日、お会いした時、(御息女の御容態が)  
難しいとお伺いしました。(僕は)多分、治  
るだろうと思っていました。が、亡くなって  
しまったと聞いて、更にお気の毒だと深く  
思います。

拝復 御入用の  
週刊たいむ  
す御使にて急  
出候 御落手  
願候  
先刻電話  
をかけたれ  
ど通じた様で  
通じないやう  
で一向不明不  
得已手紙にて  
申上候  
社へ出ぬ事は  
無精にて怒つ  
てるにあらず  
怒つたつて僕の  
やうなものがどう  
致す訳にも相成  
かね候 全くの  
處面倒だから  
のらりくらり致し居  
る次第なり あし  
からず。  
社の電話は何  
番を用ひれば  
用足るや 今日  
は第一番目にある  
編輯用の奴  
を無暗につな  
がしたりしが  
為め通せざり  
しや 又は交換  
局の方で通ぜぬ  
にや。小生「社の電話には」田舎  
ものなり。一寸教

へて下さい。小生の  
電話番号は  
番町主四木  
四五六〇に候  
あの面端書は  
記念として  
保存可申候  
難有く候

以上

十二月二十四日

夏目金之助

杉村楚人冠

兄

坐下

(訳)

先日頂いたお手紙のお返事です。

(楚人冠が手紙で)所望した『週刊タイムス』  
を急ぎ出しましたので、お受け取りください。

(その件について) さきほど電話をかけたの  
だけども通じたのか、通じていないのか、一向  
に分からなかったので、手紙にしました。

(朝日新聞)社に出社しないことは怒ってい  
るではありません。(僕が)怒ったって僕のよ  
うな者がどうにかなるわけでもありませんから。  
(出社しないのは)面倒だからですよ。

社の電話は何番にかければ用事ができますか。  
今日は一番目に書いてある編集用の電話番号に  
かけましたが、かかったのでしょうか。交換局  
の方に電話した方がよいのでしょうか。僕は(社  
の電話には)良くわからないので、ちよつと教  
えてください。僕の電話番号は番町四五六〇で  
す。

(楚人冠が出した)絵葉書は記念としてあり  
がたく保存します。